

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 10 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 年～ 2011 年

課題番号：21520611

研究課題名（和文） 国際協力現場で求められる統合的英語力育成のためのプログラムの構築と実践

研究課題名（英文） Construction and Practice of a Program Cultivating Integrated English Skills Needed in Actual Field Sites of International Cooperation

研究代表者

新田 香織（NITTA KAORI）

近畿大学総合社会学部・教授

研究者番号：10258064

研究成果の概要（和文）：国内外で収集した音声及び文書データに基づいて、発展途上国の国際協力現場で社会調査を実施する場合に求められる英語力及び背景知識の獲得に焦点を当てた教材の第一部を 作成した。その教材を用いて、日本・ベトナム両国で学生への訓練を実施し、2月にベトナムの少数民族の村で貧困・教育・水質の調査を行った。学生たちは調査に必要なとされる英語力を十分に習得し、効果的に使用できた。さらに調査も現地の住民に貢献できる興味深い結果を得ることができた。

研究成果の概要（英文）： Based on the written and oral data we had collected in and outside Japan, we wrote the first part of the teaching material whose objective is to focus on acquisition of English skills and knowledge needed for social surveys at international cooperation sites. By using the material, we trained both Japanese and Vietnamese students, and in February, 2012, we conducted surveys for poverty, education and water quality in a minority village in Vietnam. The students acquired sufficient English skills to implement the survey, interact with each other, and prepare and make a presentation. Moreover, the result of the survey could have a potential to contribute to the lives of the minority village.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英語学、外国語教育

キーワード：音声・音韻、文法、語彙・意味、英語の多様性、教授法・カリキュラム論、第二言語習得理論、教育工学・教材・教育メディア一般

1. 研究開始当初の背景

- (1) 研究代表者が自ら 10 年近くに及ぶ NGO 活動をする中で、国際協力や交流をよりスムーズに効果的に進めるには、統合的な英語力育成プログラムの必要性を実感していたこと。
- (2) 学生が英語をツールとして「使い」つつ、「地球市民」という立場で視野を広げ、自国や相手国への知識や理解を深め、相手国の人々との交流を通して、一生心に残る体験ができるように、人工的でないオーセンティックな現場を提供する必要を感じていたこと。
- (3) 国際協力、英語教育、人間教育さらに専門教育を統合したプログラムに関連した先行研究がみあたらなかったこと。

2. 研究の目的

- (1) まずアジアにおける NGO の国際協力現場で、どのような英語が使用されているか、またどの程度の発音や語彙・文法構造であれば通じるのか、より効果的な協力のためにはどのような知識や社会性が必要なかを現地で音声データやビデオデータを収集する。またメールのやりとり、契約書など支援活動で用いられる書類データも収集する。
- (2) その調査結果に基づいて、国際協力に必要なコミュニケーション能力、日本や現地に関する背景知識、社会調査に必要な予備知識、そして目的を特化して英語スキルを学ぶ E S P (English for Specific Purposes) を統合したプログラムを構築し、テキストを作成する。第一部として、協力要請のあった現地での社会調査を実践する際に必要な背景知識、英語力の獲得を目指す。
- (3) プログラムの第一部を教材で学んだ学生による現地での社会調査（フィールドトリップ）の実践をサポートし、以後の自律的継続的な国際貢献活動への基盤作りを行う。

3. 研究の方法

- (1) タイ、ラオス、ベトナム、日本それぞれで実施された 4 カ国会議で資料を収集し、また国内では JICA 図書館や国連組織などで資料を収集した。

- (2) 収集した資料を基盤として、国際協力の現場に必要な英語表現及び背景知識の蓄積、さらに学生の自律的な調査準備の啓蒙を目指した教材を作成し、その教材を用いた事前研修を実施した。

- (3) 事前研修の一環として、3 カ月間、国内において SKYPE やメールを用いたベトナム人学生と交流および調査内容の決定作業を行った。

- (4) 平成 24 年 2 月には、日本人学生 4 名と教員 2 名がベトナムに赴き、ベトナムのダラット大学の学生 3 名と教員 2 名とともに社会調査を実施した。

日本人学生とベトナム人学生がペアとなって、少数民族の家庭を 1 軒ずつ訪問して面接による貧困状況、教育状況に関するデータ収集を行った。協力して作成した質問事項をベトナム人学生がベトナム語で村人に訪ね、回答を英語で日本人学生に伝え、日本人学生が英語で書き取る手法を取った。それぞれのペアには現地の地方政府の役人及び、教員が付き添った。

- (5) 実質 1 日半で 33 軒の訪問を実施し、ダラット大学に移動してから、データ分析を行った。さらにダラット大学の学生・教員の前でそれぞれのペアが共同で調査結果を報告した。

4. 研究成果

- (1) 英語力育成プログラムに関する成果

- ① 日本と現地双方での事前研修の必要性：4 カ国セミナーやベトナムのダラット大学の社会福祉学部の学生との交流の状況を分析した結果、日本人側だけでなく、双方の学生に共通した英語力の育成が必要であるとわかった。

- ② 教材：

- ①の結果に基づいて、国際協力現場で必要とされる項目及び英語表現、そして発音の訓練、さらに社会調査の基礎と背景知識の蓄積を目的とした 3 つのもジュールからなる教材を作成した。(Module 1 : Get acquainted!---現地への興味・調査の目的も含めた自己紹介と質問の組み立て方、資料の読み方、ディスカッションに必要な表現など、Module 2 : Broaden and deepen your knowledge---「世界が 100 人の村だったら」のビデオを用いたリスニング及びディスカッション、自分の現況に対する認識など、

Module 3 : Develop a questionnaire---
ビデオや資料を用いて、社会調査の意味と方法、質的・量的調査の違いと方法、現地で使用する質問事項の準備など)

③ 教材および事前研修による英語力育成の成果：

この教材を使用して、3カ月の事前研修を経て2月に現地に赴き、社会調査を実践した。日本での準備と現地での実践を通して、双方の学生たちは、現場で必要とされる基本的な英語力に関しては、苦闘しながらも、目的を遂行するレベルまで達することができた。

日本人学生たちは、社会調査とダラット大学での発表を聴衆にわかりやすく説明し、理解してもらえただけでなく、聴衆の学生や教員からの熱心な質問も理解し、苦闘しながらも答えることができた。

思いがけなく、聴衆から少数民族に関して調査したこととその結果に対する感謝をいただき、学生たちはさらに達成感を得ることができた。

④ 国際協力への積極的な態度育成の成果：

ダラット市での発表を終えたのち、ホーチミン市にある International University の学生たちと交流した。その際、英語のみで大学の授業を受けている学生たちの前で臆することなく、社会調査の内容と結果について述べることができた。またディスカッションや即興のゲームやクイズなどでの交流などにも前向きに即応する態度が見られた。

調査のパートナーであったダラット大学の学生と帰国後も SKYPE などを用いた交流が続いている。さらに実質2時間足らずの交流であった International University の学生たちとも facebook や email, SKYPE を用いて継続的にやり取りを行っている。

つまり、事前の訓練と現地での体験が英語力の習得と継続的な国際交流、国際協力への意識を促すことを証明できた。双方の学生とも、来年も引き続き、後輩たちも交えて、継続的な調査を実施したいという希望も表明している。

このプログラムは、単なる英語力の育成を超えて、グローバルな視野、交流や支援に積極的な態度の育成にも効果が証明できたと思われる。

今後は調査や口頭発表、ディスカッションに加えて、国際協力現場で必要とされる資料の読解力、レポート作成能力、交渉力も含めたさらに統合的な能力の育成の研究を進めていく予定である。

(2)社会調査の成果

①少数民族マー族の現状

近隣に住むベトナム人に比べて極めて貧しい。研究代表者が所属する NGO は、少数民族の子どもたちが通えるようにと、村のすぐ近くに幼稚園を建設したが、ほとんどのマー族の家庭では、子供を通園させることもできない状況であった。また近隣のベトナム人の多数派であるキン族から孤立した生活を送っている家族は、ベトナム語が話せず、仕事にもつけないという負のスパイラルに陥っていた。

マー族はダム建設による強制立ち退きで、現在の村に移り住んでいるが、以前の生活様式を守り続けている家族もおり、それが衛生面での問題点につながっているケースも見られた。

②水質検査結果

水質検査に関しては、「リンの成分が検出され、数字上は安全レベルではあるが、飲料水としては避けた方がよい」などのアドバイスを現地に伝えることができた。

今後は水質改善の方法を工夫し、来年の調査で再度状況を地方政府に伝える予定である。将来的には簡易検査キットを現地で入手し、継続的に村人たち自ら検査できるようにサポートをする計画を立てている。

以下、水質検査の背景、方法、結果と考察を学生と共に検査を実施した近畿大学総合社会学部講師保本正芳の報告書より抜粋する。

ベトナム政府は、2002年に天然資源環境省(MONRE: Ministry of Natural Resources and Environment)を設置、2003年には「国家環境保全戦略」を制定した。ようやく国が、環境問題改善に積極的に取り組みはじめている状況である。

しかしながら主に南部の主要都市河川データが蓄積、公開されている(図1参照)。一方、都市部から離れた少数民族の居住地においては、水質調査が行われていないのが現状である。

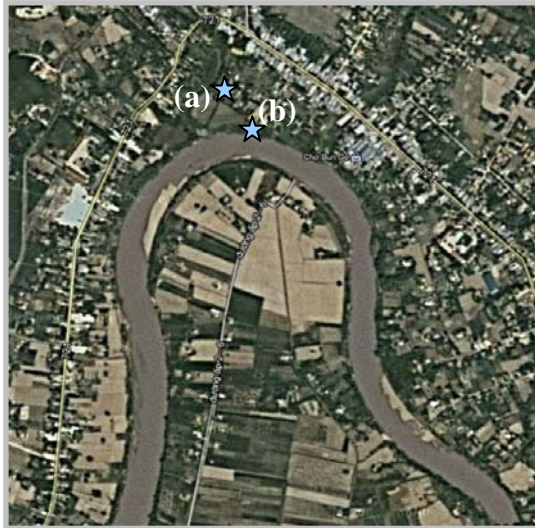
本論では、少数民族の居住地における、簡易水質分析キットのパックテスト(共立理化学研究所製)による河川及び井戸の水質調査結果を示す。

本研究では、中南部のラムドン省カッティエン郡ドンナイ町ブンゴ村にて、溶液目視比色タイプのパックテストによる水質調査を実施した。ブンゴ村は、ホーチミン市から約120km北東に位置し、政府の政策により移住してきた約30世帯のマー族(少数民族)が

居住している。彼らの元の居住地は、現在、新たな経済特区(New Economic Zone)に指定されて、キン族(ベトナム民族)によって支配されている。適切な移転計画になっていないため、ブンゴ村のマー族は生活基盤が回復されず、生活は非常に貧しい。

ベトナムで2番目に大きな河川であるドンナイ川は、中部高原地帯の山岳地帯を源流である。ブンゴ村近くに流れる河川もその一つであり、農業用水等で地域を支えている。ホーチミン近郊のドンナイ川下流は、水質汚染が著しく進んでおり、政府も対策を検討しているが、源流の状態は把握されていない。

図2の上図は、ブンゴ村周辺の拡大領域である。図中の2つの星印(青色)は、(a)ブンゴ村、(b)採水した河川の地点を示す。図2下図は、採水している様子を示す。



ブンゴ村と水質調査地点



(b)河川での採水

図2：ブンゴ村

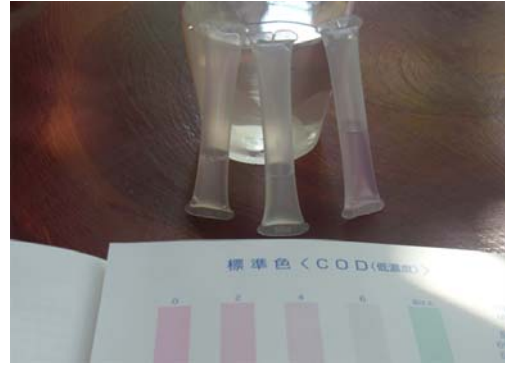


図3：使用したパケットテスト

パケットテスト(共立理化学研究所)は、小さなポリエチレン製のチューブの中に調合された試薬の1回分が密閉封入されており、使用するときにはチューブの上部にピンで穴をあけ、試験水を吸い込ませる。指定時間後に比色表と比較して、調査項目の濃度を調べる(図3参照)。本研究では、2012年2月11日(9:30~11:30, 14:30~16:30), 12日(9:30~11:30)の一時間毎に採水し、COD(化学的酸素要求量)、アンモニウム態窒素、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素、リン酸態リンの5項目を調査した(表1参照)。

表1：パケットテストの測定範囲と各測定データの範囲

測定項目	測定範囲 [mg/L]	標準色	反応時間 [分]
COD	0~8	0, 2, 4, 6, 8	4-6
アンモニウム態窒素	0.2~10	0.2, 0.5, 1, 2, 5, 10	5
亜硝酸態窒素	0.005~0.5	0.005, 0.01, 0.02, 0.05, 0.1, 0.2, 0.5	2
硝酸態窒素	0.2~10	0.2, 0.5, 1, 2, 5, 10	3
リン酸態リン	0.02~1	0.02, 0.05, 0.1, 0.2, 0.5, 1	5

図4は、川で採水した水の各項目の濃度結果を示す。横軸は採水時間（2月11日 9:30, 10:30, 11:30, 14:30, 15:30, 16:30, 2月12日 9:30, 10:30, 11:30の合計9回）、縦軸は各項目の濃度である。

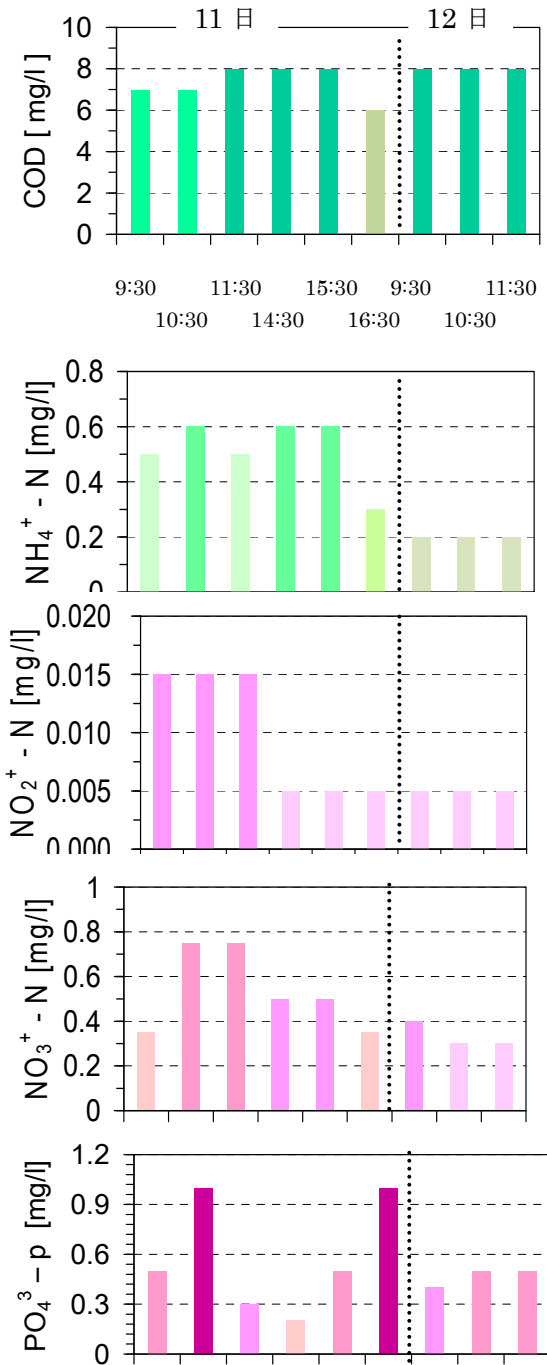


図4: ブンゴ村河川（ドンナイ川源流）での測定結果

CODは全て6以上の値となり、高い値を示した。アンモニウム態窒素(NH₄⁺-N)は、2月11日が少し高く、12日は低い値を示す。亜硝酸態窒素(NO₂⁺-N)と硝酸態窒素

(NO₃⁺-N)は全て低い値を示す。リン酸態リン(P043--P)は、高い値を示し、特に11日10:30と16:30に非常に高い値となった。アンモニウム態窒素とリン酸態リンが高いことは、比較的近くの場所から、生活排水や農業廃水などが流れ込んでいると考える。

ブンゴ村のような少数民族の居住地は、政府の関心が少ないため、水質調査を行ったことが無く、住民達の環境問題に対する意識も低い。精度の高い水質調査は、化学的手法(イオンクロマトグラフィー分析)が必要となり、知識だけでなく、高額な機器を導入しないと行えない。バックテストの結果は大まかな目安であり、簡易測定のため計測者による誤差も有るが、住民達への環境教育に最適で、デジタルバックテスト(バックテストの反応液を吸光度で計測)を用いると計測値の精度も上がるため、少額で始められる環境計測としても有効である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 下 絵津子、新田 香織、Developing Can-Do Check Lists as a Self-Evaluation Tool for University-Level English Classes、近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)、査読有、第2巻第1号、2011、pp.225-242
- ② 白川 泰旭、語学教育部のFD研修、語学教育部ジャーナル、査読無、第6号、2010、173-176
- ③ トーマス・チャールズ・クック、Start with Simple Stories (SSS): Making Extensive Reading Accessible、TESOLANZ Newsletter、査読無、Vol -19, No.3、2010、24-26

[学会発表] (計5件)

- ① 新田 香織、トーマス・チャールズ・クック、Beyond Teaching English Skills: The Road to a Collaborative Social Survey between Vietnamese and Japanese Students、大学英語教育学会関西支部40周年記念大会、2011年11月27日、兵庫、武庫川女子大学
- ② 白川 泰旭、Invitation to the Original Text、Extensive Reading World Congress、2011年9月4日、京都、京都産業大学
- ③ トーマス・チャールズ・クック、Extensive Reading、19th Annual Convention of

PeruTESOL、2011年8月1日、Lima、Peru

- ④ カロス・ラミレズ、新田 香織、Unified Testing in a University English Oral Program、大学英語教育学会関西支部秋季大会、2010年11月27日、兵庫、関西学院大学
- ⑤ トーマス・チャールズ・クック、Extensive Reading : One Teacher's ER Experience at a Japanese University、CLESOL 2010 Conference、2010年10月3日、Dunedin、New Zealand

〔図書〕(計1件)

編集：寺内 一・山内 ひさ子・野口ジュディー・笹島 茂、著者：新田 香織他33名、大修館書店、英語教育学体系、第4巻 21世紀のESP 新しいESP理論の構築と実践(第3章 2. 授業内活動担当：pp.63-79)、2010、総ページ数 251

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

新田 香織 (NITTA KAORI)
近畿大学・総合社会学部・教授
研究者番号：10258064

(2)研究分担者

白川 泰旭 (SHIRAKAWA TAIKYOU)
近畿大学・経営学部・教授
研究者番号：50259553
トーマス・チャールズ・クック(Thomas

Charles Koch)

近畿大学・農学部・准教授

研究者番号：30460926

(3)連携研究者

()

研究者番号：